1-9	演題	道具がなくても始められる
	副題	～ノーリフトケア導入のリアル～

ノーリフト	
腰痛予防対策	

法人名	社会福祉法人 川崎市社会福祉事業団
施設名	片平長寿の里

発表者名（職種）	大家　志保子 介護支援専門員
共同発表者	市毛　仁美
共同発表者	堀部　貴則
共同発表者	増子　元
共同発表者	田中　由美

都道府県	神奈川県
住所	川崎市麻生区片平 1829
TEL	044-455-4188
FAX	044-455-4190
メールアドレス	katahira@kfj.or.jp
URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	平成 23 年 4 月開所。従来型（90 床）、ユニット型（40 床）、ショートステイ（10 床）の併設型施設。理念のもと寄り添う介護と地域に開かれた施設を目指す。

研究の目的、PR ポイント

介護中、左前十字靭帯を損傷から手術、リハビリを経て復職した介護主任が「こんなに痛く、辛い思いを他の職員さんには経験して欲しくない！」と強く感じたことをきっかけにノーリフト推進チームを立ちあげました。今回の発表では、2 年間の活動内容に加え、なかなか職員へ浸透しない現状やリアルをお伝えする事で、ケアのあり方を考えるきっかけや導入の後押しになれればという思いを込めています。それに加えてノーリフトケアが、「当り前」の介護として広がって欲しいという願いを込めています。

取り組んだ課題

職員の腰痛や怪我が増加していること、さらに利用者の移乗時に怪我が発生するケースもみられることから、ノーリフトケアの必要性について着目した。
しかし、ノーリフトケアの重要性については理解があるものの、実際に現場でどのように実践していけるのかが課題となった。そこで職員がノーリフトケアを実践できる環境作りや意識改革に取り組んだ。

具体的な取り組み

① ノーリフトに興味・関心のある職員を集め、ノーリフト推進チームを発足（PT もメンバーとなる）
② ノーリフトケアの理念の共有
③ 職員の体調アンケートを実施し腰痛や体調の確認
④ 他施設で実践している職員に協力を依頼し研修を開催（手軽に始められる移乗方法など）
⑤ 福祉用具の安全性や車イスの乗り心地の確認
⑥ 福祉用具業者に依頼し用具の取扱いデモを実施
⑦ 最も必要な用具を選定・導入
⑧ チームから委員会へ発展そしてノーリフト宣言へ

活動の成果と評価

ノーリフト推進チームの発足後、研修の企画や講師の依頼、職員へのアンケートを実施を通して、職員の意識の中にノーリフトケアの必要性が徐々に浸透していった。またこれまで行なっていた介護の方法を振り返る機会にもつながった。さらに福祉用具の活用を進めてきたことで、職員・利用者双方の怪我や事故が減少する成果が見られた。

今後の課題

まだ、取り組み途中であるため、今後もノーリフトケアの理念を職員に浸透させていく必要がある新規採用職員にも継続的に伝えていかなければならない。あわせて福祉用具のどう縫うに向けて使用根拠を明確にし、必要な用具を適切に導入していく事が課題である。今後もノーリフトケアへの取り組みをさまざまな場で発信し、職員も利用者も「心も体も元気に介護ができる･受けられる」環境を整えていきたい。ノーリフトケアを業界の当たり前にし福祉・介護の未来を変えていきたい。

参考資料など

ノーリフティング手引書
「ノーリフティング導入における目的と現状把握」